

まことの羊飼い

ルカ 2 : 1 - 20



司祭 ヨハネ 井田 泉

2021年12月24日

降誕日前夕

彦根聖愛教会にて

「その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。『恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。』」ルカ2:-11

毎年クリスマスに読むこの聖書の箇所を、今回あらためて丁寧に読んでみました。ギリシア語原文を確かめてみたのです。するとこれまで気づかなかったことに気づきました。

「すると、主の天使が近づき」ルカ 2:9

これは直訳すると「主の天使が彼らに現れた」、あるいは「主の天使が彼らのもとに立った」となります。何となく近づいたのではありません。天使は目的を持って、あの羊飼いたちを指してやってきて、彼らに現れました。彼らの前に天使が立ったのです。羊飼いたちは衝撃を受けます。

「主の栄光が周りを照らした」2:9

周りを照らしたというと、何かの周辺が照らされているように感じるのですが、ここには「彼らを」という目的語が書いてあります。「主の栄光が彼らをめぐり照らした」。サーチライトのように、主の栄光が羊飼いたちとその周りを照らし出したの

です。

主の栄光というのは、実は神さまご自身の臨在の輝きのことです。羊飼いたちは神を前にしていることをはっきりと感じて、非常に恐れしました。

すると天使は彼らに言います。

「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。」2:10

ここも原文は「民全体に与えられる大きな喜びをあなたがたに告げる」となっています。この大きな喜びを、ほかでもない「あなたがたに」告げる、と天使は言うのです。

新共同訳聖書では代名詞が省かれているのですが、ギリシア語原文は、主の天使が彼らに現れ、主の栄光が彼らをめぐり照らし、天使は彼らに言い、天使は大きな喜びをあなたがたに（羊飼いたち）告げる、なっています。

このように「彼ら」あるいは「あなたがた」を繰り返すことで、聖書は、天使の働きかけ、神の働きかけが、彼ら＝この羊飼いたちに対してなされたのだ、と強調するのです。彼らに、神の慈しみが注がれています。

もし、今も天使がいるとしたら——必ずいると信じます——主の降誕を告げる天使は、漠然と空間を漂っているのではあり

ません。天使はわたしたちを目指してやってきます。主の栄光はわたしたちをめぐり照らします。天使は降誕の喜びをわたしたちに告げてくれます。わたしたちは神の働きかけの対象です。わたしたちは、神さまが目をとめて慈しみを注いでくださる相手です。

『あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。』すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

『いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。』

天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、『さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか』と話し合った。そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。」

羊飼いたちが探し当て見出したのは、飼葉桶に寝かせられた乳飲み子でした。けれども、この方イエスこそが、まことの羊飼いなのだ、と聖書は語ります（ヨハネ 10:11、14）。

わたしたちは聖書に導かれて、飼い葉桶に寝かせられた乳飲み子を、心の目で見つめます。

この方が、実はわたしたちを求めて来られた。わたしたちを探し当てられた。それがクリスマスです。この方が、わたしたちを慈しみの目で見つめられます。

わたしたちを見出すために幼子となって来られた主イエスさま、どのようなときも、わたしたちの羊飼いとなって、わたしたちを守り養い導いてください。アーメン